

アジア・太平洋研究センター主催、地域研究センター共同研究共催シンポジウム

日 時：2008年2月29日（金）

場 所：名古屋キャンパス J棟1階 特別合同研究室

テーマ：民主化過程における選挙—政党・候補者・投票行動

基調講演：小野耕二（名古屋大学大学院法学研究科教授）

韓国セッション：浅羽祐樹（山口県立大学国際文化学部講師）

金光旭（名城大学法学部客員研究員）

途上国セッション：吉川洋子（南山大学総合政策学部教授）

加藤隆裕（南山大学外国語学部教授）



小野耕二氏による基調講演



浅羽祐樹氏



吉川洋子センター員



レセプション

要 旨

I 基調報告「民主化過程の比較政治学へ向けて」

小野耕二

名古屋大学大学院法学研究科

小野教授の専門は欧米先進国の比較政治学であるが、近年は民主化移行国を含めた「比較民主化」論に関心を広げられており、多くの論文を発表されている。

小野報告は、欧米先進国の民主主義の多国間比較の研究、発展途上国まで広げた指標データベースの構築研究の紹介に始まり、ヨーロッパ大学機構の「比較民主化論」プロジェクト、およびハイデルベルグ大学のメルケル教授の「埋め込まれた民主主義」(Embedded Democracy) の5構成要素とこれらに対応した途上国の「問題ある民主主義」(Defect Democracy) 類型を紹介され、後者のプロジェクトは途上国の民主主義は不十分ながら「ある種の『均衡』を達成している」と評価するところにあると指摘された。時間の制約から支援策と外部による民主化促進論には触れられなかったが、フルペーパーの中ではシュレーダーの Exporting Democracy とホワイトヘッドの民主化への国際的力学の3類型メカニズムをとりあげられた。最後に、アジア政治の多くの「個別事例研究的」業績を「法則定立的」作業と実践的課題の追求に結びつける努力が必要であると結ばれた。

II 韓国セッション

第1報告 「韓国における大統領候補者の選出と政党政治」

浅羽祐樹

山口県立大学国際文化学部

浅羽報告は、韓国の第17代大統領選挙を例に、「誰が選出されるか」とならんで候補者が「どのように選出されるか」(選出方法、選挙制度)が重要という観点から、選挙学的手法と、詳細な実証データ分析に依拠する地域研究の双方が見事に結びつけられた興味深い報告であった。フルペーパーは韓国大統領選挙の過程を詳細に網羅したものであったが、報告は時間の制約から大統領候補者選出方式(予備選挙にあたる)が中心であった。まず候補者資格は排他的で、党员の中から政党内選出で決める第1段階と、選出者資格が包括的で一般有権者まで拡大され、誰もが候補者選出に参加できる国民競選(完全または制限的、世論調査や携帯電話投票を含む)という第2段階

からなる2段階方式を図式的に提示され、これを大統合民主新党とハンナラ党の実証分析に適用され、とりわけ後者の事例に照らして2段階方式の候補者選出では選出候補者の逆転がおきること、その場合の政党政治という含意の問題を指摘された。

第2報告 「韓国におけるイメージによる選挙」

金光旭

名城大学研究員（共同研究メンバー）

金報告は浅羽報告と同様、第17代大統領選挙について、政党や候補者が有権者に支持を求めてイメージを作り出す、そのイメージ戦略の選挙への影響の重要性を、とくにテレビ政治広告の写真や動画をまじえながら報告された。韓国では各政党の国民選挙に世論調査の結果を一定割合で反映させる形で、画期的な国民参加の仕組みが導入されている。このため候補者イメージが政党支持率に大いに影響する。イメージは有権者が対象にいだく既存の認知の投影であることを踏まえ、テレビ政治広告の例として、とくにハンナラ党の李明博候補の市長時代の「サラリーマンの神話」を基に庶民的なイメージ戦略やキャッチコピーにより経済問題や経済回復政策を訴えることに成功した、と分析された。

Ⅲ 途上国セッション

第1報告 「パフォーマンスの行方——ペルーの事例より——」

加藤隆浩

南山大学外国語学部（共同研究メンバー）

加藤報告は、文化人類学の見地から、ペルーの異なる二人の大統領候補者（トレド2001年、ウマラ2006年）の選挙運動に共通して見られた「インカ使い」についての報告であった。民政移管後のペルーでは選挙権の識字能力制限が撤廃され、有権者の拡大という民主化がおきた。そこでペルー社会の大票田である貧困層＝先住民の支持をあてに、インカの末裔の大統領候補者が「歴史上のインカ」や理想のインカ帝国の「記憶としてのインカ」など様々な伝統儀式パフォーマンスを駆使して「豊かなペルー」を公約し、全能、迅速の理想的リーダーを演出して当選する。しかしインカの呪文の効力もそこまでで、インカ王のように「与えてくれない」トレド大統領は偽インカであると露見し、最も不人気な大統領となった。大票田目当ての現代のパフォーマンス選挙戦略にも通じる報告であった。

第2報告 「候補者中心投票行動 ——フィリピンの民主化の行方——」

吉川洋子

南山大学総合政策学部（共同研究メンバー）

吉川報告は、「民主化定着には政党制の確立が不可欠」という定着論の主張に照らして、民主体制のフィリピンが民主化定着へ向けて軌道にのっているのかどうかを検証しようと試みたものである。はじめに民主化定着の若干の理論的検討をした後、フィリピン人の選挙観、選択軸なき多党制、有権者の支持政党なし率の高さ、政党への態度、政党と所属政治家の結びつけの弱さ等に特徴づけられた候補者中心選挙と投票を、各種の世論調査のデータで示し、このようなフィリピンの候補者投票および個人投票の傾向について、フィリピン政治エリートの特徴、ノリスの「投票構造と候補者選択」の図式の修正と選挙制度、大統領制の制度的所産の3点から説明した。最後にダールとハンティントンの民主化定着への有利条件に照らして、フィリピンは政党制の確立度が低いにもかかわらず、かなり好条件に恵まれているように見えるが、経済発展力、統治ガバナンス、選挙行政・選挙ガバナンス問題など乗り越えるべき問題が多いことを指摘した。

（文責 吉川洋子）